



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オランダにおける新聞成立と普及、その特性について
Author(s)	江口, 豊
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 69, 117-128
Issue Date	2016-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61066
Type	departmental bulletin paper
File Information	05_Eguchi.pdf



オランダにおける新聞成立と普及、 その特性について

江 口 豊

0 序¹

1605年にストラスブールでヨーロッパ最初の印刷形態の新聞が刊行されて以降、ドイツ語圏には燎原の火の如く新聞が各地に普及していった。この動きは当然のことながら他の言語での新聞発行をも促すことを意味した。言語を共有する地域、言い換えれば神聖ローマ帝国の版図の中核地域であるドイツ語圏内であれば、大きな文化的障害は考えにくい。イギリスやフランスのように言語も政治体制もまったく別個の「異国」で国境という壁が厳然として存在する場合も、普及が容易とはならないことも推測できる。実際両国での新聞発行には若干の時間差が生じている²。では言語そのものの近親性も高く、地理的にも陸続きで隣接し、さらには情報通信としての駅通制度も接続され、政治体制上も公共コミュニケーションに対する許容度が高い印象をもたれているオランダの状況はどのようなものだったのだろうか。拙稿では、17世紀前半の早い段階で新聞発行が確認されている隣国オランダの状況を、先行研究に依拠しながらいくつかの点に絞って紹介する。また最古の現存新聞資料なども例示してみたい。

1 オランダ新聞研究史について

オランダの研究者からは、新聞発行の歴史を概観できる研究の不足を嘆く声があるものの、図書館や文書館などでの新聞一次資料の発見がこれまでの進展をもたらした。とくに活版印刷術の伝播でも先頭集団を走ったともいえるオランダは、新聞発行の点でも同様に扱われて然るべき存在であろう。Lankhorst (2001) によれば、オランダでの新聞史研究の進展に伴い、オランダ語での新聞の起源は徐々に遡ることとなった（表1参照）。

オランダ最古の新聞について判明しているのは、Courante uyt Italien ende Duytschland & c.³ 紙が1618年アムステルダムでCaspar van Hiltenにより編集刊行され、Joris Veselerが印刷していたことである。現存する最古の紙面には1618年6月11日付けのケルン発の記事が掲載されていることと当時ケルンからのニュース到着に通常4日を要していたことを根拠に⁴、

Maier (2003, 174f.) は発行日を 6 月15日と推定している。もちろん。今後新たな一次資料等の発見によってオランダにおける新聞の開始が遡る可能性があるものの、当時の推定印刷部数500部を根拠に、Koopman (2008, 125. 脚注 8) はこれに否定的である。

また、翌1619年の紙面が現存している Tydinghen uyt verscheyde quartieren⁵ 紙は Broer Jansz により刊行された。両者に共通して興味深い点は、オランダ語の新聞であったがまもなく英語版、フランス語版もそれぞれ発行され、輸出された点かもしれない⁶。オランダの新聞も都市で生じ、地域的にはホラント州、とくにアムステルダムを中心に発達したといえる。それはアムステルダムで1645年までに 9 紙の新聞が成立したことに端的に表われている。

【表 1】

年号	発見者	発見場所	新聞のタイトル・日付など
1865	Eugène Hatin	パリ 国立図書館	Tydinghen uyt verscheyde quartieren 紙および Courante uyt Italien ende Duytschland 紙 1637年 6 月20日付け「第25号」 ⁷
1880	W. P. Sautijn Kluit	英国図書館 ロンドン	Courante uyt Italien, Duytsland Etc. 紙 1619年11月25日号
1903	W. P. Sautijn Kluit	アントワープ市立図書館	Tydinghen uyt verscheyde quartieren 紙 1619年 8 月31日号
1938	Folke Dahl	王立図書館 ストックホルム	Courante uyt Italien ende Duytschland &c. 紙 1618年 6 月14日号

Lankhorst (2001) により作成

オランダにおける新聞の普及をドイツ語新聞の普及と比較した表 2 をみると、国土の広さや人口を考慮すれば、ほぼドイツに比肩しうるペースで広まっているといえよう。

2 新聞発行のいくつかの前提要件

2.1 活版印刷術

印刷形態の刊行物であり、書籍ほどの複雑な工程を必要としない（単純な 2 頁もしくは 4 頁印刷）、低品質で安価な紙を利用する、さらには定期購読で安定的な収入が確保できるなどの製作側のメリットも含めて考えると、定期的なニュースが入手できれば、つまり郵便や飛脚制度が整備された都市での新聞発行は理論的には可能である。印刷術の「発明の半世紀後（1495年頃）で、ヨーロッパの350都市に1000以上の印刷所があった」⁸ 状況を考え、使用する印刷用活字の相違という言葉に起因する要素が技術上大きな問題にならないことを踏まえれば、どんな言語であれ新聞発行は可能だったはずである。

【表2】17世紀中期までのドイツ語・オランダ語新聞一覧表（刊行順）

年号	ドイツ語新聞の刊行都市名	オランダでの新聞刊行地・タイトル
1605	ストラスブール	
1609 1615	ヴォルフエンビュッテル フランクフルト 1617 ベルリン	
1618	ハンブルク	アムステルダム Courante uyt Italien ende Duytschland &c.および Tydinghen uyt verscheyde quartieren *アムステルダムで9紙確認（1645年迄）
1619 1620	ヒルデスハイム ダンツィヒ ⁹ シュトゥットガルト フランクフルト ケルン	1620 アルンヘム Arnhemsche courant
1621 1622	ギューストッロー ウィーン	
1623	チューリヒ ケーニヒスベルク ¹⁰	デルフト Courante uyt Italien, Duytsland ende Nederland
1625 1627 1632	エッティンゲン ロストック ミュンヘン 1630 ヘルフォルト ブレーメン 1633 シュテッティン ¹¹	
1637 1643 1644 1646 1655	プラハ ライプツィヒ エアフルト ブラウンシュヴァイク ベルン 1657 コペンハーゲン	1635 ハーグ 1652 ハーレム 1756 ヴェースブ 1666 ロッテルダム 1675 ユトレヒト 1686 ライデン

Bogel/Blüm (1971) および Lenkhorst (2001)、Koopman (2003) を基に作成。発行地不明のケースは除外。

グーテンベルクによる活版印刷術の発明に関しては、木版印刷の興隆期が先行したことが指摘されている。フランスと並んでオランダでも木版印刷が盛んだったこともあり、オランダではグーテンベルクではなく、「ハーレムの住民であったコスターことラウレント・ヤンソンが1441年以前に、鋳造した活字を組み、一つのテキストを機械的に複製する技術を発明した」と主張されることもあった(フェーブル／マルタン上巻118.)。そうした経緯もあり、オランダ王国という現在の地理的範囲では収まらないものの、17世紀前後の Nederland という意味で考えると、かなり早い時期に印刷術が普及していた。フェーブル／マルタン(1985、下巻24f.)によると、マインツでのグーテンベルク聖書印刷からわずか20年余りの「1473年にディルク・マーテルとヴェストファリアのヨハネスがルーヴァン（現在のベルギー）で働き始め、1477年にはヘーラルト・レーウがハウダ（日本での呼び方に従えばゴード）に工房を開い」たという次第である。1473年にはユトレヒトでの印刷所の開設も紹介されており¹²、「1480年には……オランダの八都市で」印刷所があったとされている。

2.2 手書き新聞

ドイツ語圏では、新聞史研究者が印刷新聞の直接的な先駆形態をいくつか指定している。手

書きの新聞 (geschriebene Zeitung)、定期性に欠けた突発的な発行形態の一枚印刷のチラシ (Einblattdruck) やいわば号外新聞のようなもの (Neue Zeitung)、さらには、半年に一回開催される書籍見本市に合わせて編集され、直近6ヶ月間の最新の出来事をまとめて印刷した見本市通信 (Meßrelation) が挙げられる。これにパンフレットが加わるが、これは事実報道としてのニュースというよりも、批評、批判を伴う意見主張の印刷物が多い。後世の新聞の内容を考えると、この論評の要素の先駆と考えられる。もちろんオランダにもチラシやパンフレットがあったが、以下でとくに手書き新聞の状況を先行研究の成果を紹介したい。

オランダでも手書き新聞が印刷新聞に先行しており、とくに統治機構は手書き新聞を購読していた。例えば、「1590年にはオランダ議会在ケルンの手書き新聞発行人 Engbert Pillicorne に対して、ローマ、イタリア、ドイツからの手書き新聞の提供に100ギルダーの支払いを決定したこと、さらに1592年以降はその後継者である Hendrick van Bilderbeeck に対する200ギルダーの支払い記録が残っている」。しかし「オランダ議会ばかりでなく、国と地方レベルの参事等もこうした手書き新聞の購読者となっていた」(Lankhorst 2001, 154.)。また、「こうした手書き新聞の購読者たちは、当然ながら印刷新聞が登場するとその購読者となった」(Lankhorst 2001, 154.)。「ハーグの書籍商 Aert Meuris はホラント州議会に対して、1610年から1624年の間に手書き新聞と印刷新聞とを提供して年間1100ギルダーを受け取っていた」し、「1619年にはアルンヘム議会在 Bilderbeeck に手書き新聞ではなく印刷新聞の提供を求めることを決めた」、「ホラント州の政府機関が複数の印刷新聞を入手していた」ことが記録されている。神聖ローマ帝国治下のドイツ語圏でも統治者がニュースを求めて、カrolス of 新聞の購読者であった点を想起させる点である。

2.3 新聞発行を巡る政治的環境

当時のヨーロッパでは、絶対主義君主国家の英仏やイタリア諸都市のように政策的要因により敢えて新聞発行を許容せず、新聞普及の点でドイツ語圏よりも若干の遅れを示す場合もあった。この点、オランダはスペインからの独立を果たした民主的統治体制で、政治的な許容度が高いという印象をもたれている。新聞発行以前の段階でも「書籍商は政府からの激しい抵抗に見舞われることはなかった」し、また「活字メディアの検閲に対して連邦政府は控えめな立場を持ち続けた」。当初は「事前検閲もなかった」というのである (Lankhorst 2001, 153.)。こうした背景としては「強力な中心的な権威の欠落」が挙げられている。また、検閲で問題となる教会も、オランダの場合改革派であり、カトリック教会のような、ある意味で強権のかつ「独占的な立場」を享受していたわけではない (Lankhorst 同上)。17世紀のオランダでは、「新聞発行人が第一に関心事としていたのは、ニュースを集め、印刷する」ことであり、「政治問題に関する議論とか政府批判はパンフレットに掲載された」とされている (Lankhorst 同上)。

しかしながら、Koopman によれば、通例新聞発行人は在住都市当局に発行のための請願書を

提出することが多かったようである。それが神聖ローマ帝国内のように新聞の「独占発行」と独占的販売を意味することもあり、単に「都市当局のお墨付き」を得ただけという場合もあったようである。「公的に認定された新聞」であることは信用にも影響するので、決してマイナスにはならないであろう。ちなみにアムステルダムの新聞草創期に活躍した Caspar van Hilten と Broer Jansz の二人について、請願書の類の存在は知られてはいない。ただし、二人は1624年に「公式に認可された新聞発行人の対価としてアムステルダム市の孤児院に幾ばくかの金子を寄付」したことが記録に残っている (Koopman 2003, 131)。

初期の新聞の公式な認可や独占的発行・販売に対する義務として、Koopman (2003, 131) が挙げているのが「敏感な政治的、宗教的情報を」表面化させないように注意することであった。「17世紀前半はあまり問題にならなかった」理由としては、「外国の状況や出来事に関する商業ニュース」が中心だったことと、「国内政治の決定事項について意見表明しようとはしなかった」ことだとされている。カロルスがある種の自己規制を課していたことを想起させる。

17世紀が経過するうち、とくに後半以降、こうした点で変化が起こり、「望ましくない報道に対する苦情」が生じだした。対象領域は外交上の問題となりうる外国報道、もう一つが国内政治上の問題となりうるニュースである。前者は外国の使節から苦情が提起され、後者は国内の、とくに連邦政府レベルや州政府レベルが挑発な記事に苦情を申し立てる場合であった。時には一時的な発行禁止処分、発行人の職務禁止処分などもあった。つまりオランダといえども報道や表現の自由を最初から謳歌していたとはいえない状況だったということになる。しかし、オランダの特異性は、発行許可の請願書の提出先があくまで都市当局であった点、都市当局が連邦政府や州政府の意向に必ずしも従わなかった点であろう。Koopman は、「連邦政府、州政府、はては王宮でさえも、ハーグ以外では（新聞の）禁止処分に関しては都市頼みだった」とさえ言い切っている。中央政府などではなく、都市が形式上も新聞発行の最終責任を負っていたということである (Koopman 2003, 138.)。

3 Dahl (1946) による 17 世紀のオランダでの新聞発行状況

現時点で最古のオランダ語新聞は、ストックホルムの王立図書館で1938年に発見された。冒頭に紹介したように、この発見以前には、パリ国立図書館所蔵分が最古であると確認された時期もあり、最古の新聞という問題に関しては何度かの変遷を経ている。オランダ国内ではハーグの王立図書館に所蔵されている1634年発行のものが最古である。フォリオ版の紙の半分の大きさに合わせて横二段組で印刷されたが、一枚のフォリオ紙に同一の内容を二組み同時に印刷したと考えられている。1619年以降は、通し番号、日付、発行人名が記載されるようになっていた。また、1620年以降には紙の両面印刷が始まった。

Dahl (1946, 18) によれば、アムステルダムにニュースが駆通・飛脚などで入信すると、まず

翻訳され、記事が遠方の事件や古い日付のものから並べられ、後になればなるほど新しい、近隣の事件が並ぶように編集された。以下に紹介する紙面でもその順番が守られている。さらに日付の無い短信もあった。最後には広告や広報も掲載されることがあった。Courante uyt Italien ende Duytschland が示したこの記事掲載のパターンはその後のほかの新聞にも踏襲されたと言われている。

3.1 初期の主要なオランダの新聞

Courante uyt Italien ende Duytschland &c. については、前述のとおり発行人が Caspar van Hilten、印刷人が Joris Veseler と判明しているが、Dahl (1946, 33f.) はアムステルダムの結婚登録簿から、Caspar van Hilten がハンプルク出身のドイツ人だったと推測している。van Hilten は、1620年8月28日付けの新聞に自らの名前を新聞紙面に印刷させるが、1620年もしくは1621年には Courante uyt Italien ende Duytschland &c. のフランス語版の新聞を発行している。Dahl (1946, 54.) によれば、フランス語版は Courant d'Italie & d'Almaigne, &c. というタイトルで、1620年9月12日付けが最古のものとして現存している。通し番号は無く、内容はオランダ語版と同じで、オランダ語版の翌日に発行された可能性がある。1620年の9月19日付けの場合は9月18日発行のオランダ語版と同じ内容であることが確認されているためである。このフランス語新聞の印刷人はライデン生まれの Jakob Jakobsz とされている。Courante uyt Italien, Duytsland &c. は週刊だったが、特定の発行曜日が決まっていたわけではない。後に土曜日だった時期もある (Dahl 1946, 36)。1618年発行分で現存しているのは、6月14日号を除くと、6月22日号、11月15日号、11月23日号、11月30日号の5部のみである Dahl (1946, 37.)。Caspar van Hilten の新聞事業は息子の Jan van Hilten (1602-1655) に引き継がれたと考えられている。

Dahl (1946, 56.) が名前を挙げているアムステルダム第二の新聞は、Tydinghen uyt verscheyde Quartieren で、発行したのは書籍販売業者兼印刷人 Broer Jansz (1579-1652) である。17世紀前半の他のオランダ語新聞と違い、当初タイトル無しで発行されたが、1629年以降表記のタイトルが付けられた。また、Broer Jansz も、この新聞を英語とフランス語に翻訳して販売した Dahl (1946, 55f.)。1629年以降付けられたタイトルでは、タイトルの続きおよび活字フォントが多岐にわたっている (ローマン体、イタリック体、オランダブラックレターなど)。新聞発行日としての日付は無いが、オランダ国内の事件報道の日付の翌日発行ではないかと推測されている。1619年から1623年までは発行曜日が一定しておらず、1624年以降は土曜日に固定していた。フランス語訳は Nouvelles de divers quartiers といい、Broer Jansz はフランス語印刷物にはローマン体を使用した。オランダ語版の二日後に (月曜日) 刊行されたと考えられる。記事の90%はオランダ語版の翻訳であるが、このフランス語版はオランダ在住のフランス語話者のためではなく、基本的にフランス向けの輸出新聞だった。

Dahl (1946, 78.) によれば、1648年時点でアムステルダムには少なくとも3紙が毎週土曜日に刊行され、並存していたらしい。それが、Saterdaeghsche Courante と Courante uyt Italien, Duytslandt, &c.、それに Tijdinghen uyt verscheyde Quartieren である。

Dahl (1946, 52.) は、上記の三紙の他にも、1644年2月11日付けが最古の新聞で、通し番号もなく、奥付が短い、印刷人の住所も指名も記されていない、Extraordinarie advijsen op donderdag (Woensdag) (『木曜(水曜)特別新聞』)¹³ という新聞も紹介している。記事の特徴は、ニュースが北方諸国(英国、スカンディナヴィアなど)のものが中心だったことである。

3.2 17世紀のオランダ語新聞業に登場する人物

Dahl (1946) は、上記以外にも、新聞発行に関わった人物を簡単に紹介している。例えば、1642年11月1日付けの実物が残っている Europische Saterdaeghs Courant 紙の印刷人兼発行人 Mathijs van Meininga もその一人である。彼は Europische Donderdaghs Courant (1642-1643) も発行している (Dahl 1946, 70.)。さらには、Broer Jansz の息子 Joost Broersz (1609-1647) は、日付はあるが通し番号のない新聞 Courante Extra-Ordinaire を1639年ごろから毎週火曜日に発行していた。恐らく、この後継紙が Ordinaris Dingsdaegsche Courante ではないかと Dahl (1946, 75.) は推測している。当初製本師だったが、のちに書籍商となった Francoys Lieshout (1596-1646) も、1638年の Extra-Ordinaire Courante 14号を発行したと考えられている (Dahl 1946, 79.)。Jan Jacobsz Bouman (生年不詳-1671) も、通し番号の無い1645年発行の新聞 Extra Europische Tijdingen uyt verscheyde Quartieren を発行している。タイトルは義父 Broer Jansz の Tydinghen uyt verscheyde Quartieren を参考にしたものかもしれない。これはアムステルダムで最初に週2回発行された新聞である (Dahl 1946, 83.)。Dahl が最後に名前を挙げた新聞発行人は、Jakob Thomasz Sergeant (1609-1636) である。彼も印刷業者として活動していたが、タイトルの無い新聞をアムステルダムで発行した。彼の新聞の特徴は、小型フォリオ版の片面印刷であり(1619年以降のアムステルダムの他紙は両面印刷)、おそらく Arnheimsche Courante の抜粋で構成され、再度印刷されていたのではと推測されている (Dahl 1946, 87.)

アムステルダム以外の新聞発行地で、Dahl がとくに触れているのがアルンヘムとデルフトの二都市である。1621年5月17日印刷の新聞が最初のもの(印刷人の名前無しだが、Jan Janssen と推測されている)で、1623年始め以降には通し番号が付されているが、タイトルは無いままである。これは、おそらく Arnheimsche Courante の母体となった新聞だと考えられているが、遅くとも1632年以降は Jakob van Biesen が発行人だと判明している (Dahl 1946, 84.)。一方デルフトでは、Courante uyt Italien, Duytslandt ende Nederland が発行されていた。発行者は Ian Andriesz Cloeting で、彼の死後(1632年)その妻が、さらにはその息子が新聞を継続したらしい。とくに1643年以降は息子 Andries Cloeting が発行したことが確認されている

(Dahl 1946, 84.)。

ここまで Dahl (1946) により草創期のオランダ語新聞に関わった人物や都市について述べてきた。これについて Koopman (2008, 138) は、当時の状況全般に的確な全体像を与えてくれている。「最初の乱立期が過ぎると、アムステルダム市は新聞のタイトル数を一つに限定し、それ以外のジャーナリストたちを規則で拘束した。その他の都市はだいたい一都市一新聞であった。17世紀のオランダの都市以外では、新聞というものがいまだに成立しなかった。」

4 オランダ最古の新聞記事の実際

それでは17世紀前半のオランダの新聞はどのようなものだったのだろうか。以下に紹介する記事の実例は、現存する最古のオランダの新聞 *Courante uyt Italien, Duytslandt, &c.* の紙面のある一日の記事の概略¹⁴を紹介するものである。印刷の日付は1619年5月15日、印刷人の氏名が Joris Veseler と紙面の最下部に印刷の日付とともに明記されている。当時の *Courante uyt Italien, Duytslandt, &c.* 紙は記事自体のタイトルは無く、記事の発信地と発信の日付のみが記載されている。通常、この新聞記事には様々な発信地が挙げられている。発信地として頻度が高いのは、ヴェネツィア、ウィーン、プラハ、ケルン、ハーグ、さらにはフランクフルトやローマなどである。変わったところでは各陣営発というものも見受けられる。1619年5月15日付け印刷の紙面には、四箇所の発信地が挙げられているが、それは記事として4本のニュース報道を必ずしも意味しない。

- (1) 1619年4月26日付けヴェネツィア発の記事には、スペインからの軍費送金と軍増派について記されている。とくに海軍の派遣規模（ガレー船7隻などと規模も記載）とギリシャのコルフ島という派遣先なども含め、当時役職として設けられていたナポリ副王の状況も報道されている。
- (2) 1619年4月27日付けウィーン発の記事では、教皇特使やマインツ、ザクセンなどの選帝侯たちの使節のウィーンでの外交活動を記している。注目されているのは、フランクフルトで近々開催される皇帝選挙とその候補者であるフェルディナント国王と、ボヘミア処遇などを巡るカトリック等族とプロテスタント等族の意見の不一致である。
- (3) 1619年4月28日付けプラハ発の記事では、もっぱら三十年戦争の発端となったボヘミア情勢の報告であり、クール伯爵の軍勢がイグラウという都市を陥落させ、ボヘミア内部へ進軍したことや、最高司令官の動静、ビールで有名なブジェヨヴィツェ（バドワイザーというビールメーカーの名前の由来）が包囲されたことなどが報道されている。
- (4) 1619年5月11日付けケルン発の記事の主要テーマは複数ある。まず、7月20日と日付も明記されたフランクフルトでの皇帝選挙である。プファルツ、マインツ、ザクセンの選帝侯たちがフランクフルトに先遣隊をおき、宿所も確保したことが紹介されている。第二にス

ペイン軍の神聖ローマ帝国西部、アルザスやメッツでの動静が報告されている。またフランクフルトでの軍の展開・移動が騎兵や歩兵の数字を挙げて記されている。

- (5) 1619年4月28日付けハーグ発の記事も四つのテーマを含んでいる。第一にオランダ国内での重要問題であるが、共和国法律顧問であったオルデンバルネフェルトの処刑（斬首刑であった）とその事後顛末に関わる記述、第二に、イギリス、ロンドンからの通信として、東インドを巡るイギリスとの交渉の不調を伝えている¹⁵。第三にサヴォアとデンマークの外交使節や新しい同盟に関するニュース、第四にスペインでのロドリゴ・カルデロン伯爵の幽閉を巡るニュースである。

背景情報として承知しておかねばならないのは、何と言っても1618年にプラハでの「プラハ窓外投擲事件」をきっかけに勃発した三十年戦争開戦直後だという点であろう。またこの1619年にはフェルディナント2世の神聖ローマ皇帝への選挙を控えていたこと、オランダとイギリスやポルトガルなどの他の海外進出国家との競合があったことであろう。

5 結びに代えて

拙稿ではオランダにおける新聞普及を先行研究に基づいて断片的ながら紹介してきた。ドイツ語圏の新聞史研究すら紹介されることが稀である上、いわゆる主要国家とは扱われない小国オランダのそれに対する関心は必ずしも大きいとは思われない。しかし、小国での事象からこそ見えてくる発見や問題点、また従来の仮説の検証という点からも、今後もある意味で注目と検証が必要であると考ええる。

前章の実際の記事が象徴的に示しているのは、オランダで新聞が逸早く普及した土壌として、三十年戦争という未曾有で終結の見えない非常事態、それとの連動もあった八十年戦争（1568年から1648年）をオランダ自身がスペインに対して戦っていた最中で（たまたま1609年から1621年は休戦中）もあったことであろう。また、オランダの海外進出が華々しく展開され、とくにポルトガルから胡椒貿易の独占的地位を奪い、競合するイギリスをも押しのけ統一東インド会社の設立・経営などを通じて大きな経済的成功を収め、これ以降「黄金の世紀（de Gouden eeuw）」と呼ばれるほどの隆盛期を迎えていったことも承知しておく必要がある。

こうした歴史的状況を考えるとき、ドイツ語圏で新聞が成立し、隣国とはいえ、どこよりも切実に公共的な情報流通を必要としていたと考えることもできる。求める者がいれば、それを提供する者が登場するという単純化は極端かもしれないが、オランダの状況は情報拡散に関しては切迫したものといえよう。先行研究でもこうした点が強調されている。Koopman（2008, 124）は、「1600年頃のオランダの商業的發展や置かれた国際政治の情勢の点で、情報への需要が増大していて、それが印刷情報というソースの拡散に対する市場を促進した」と述べている。そして、こうした情報への需要をもっていたのは、必ずしも「国境をはるかに越えて交易の接

点を求めているオランダ商人ばかりではなく、「スペインのハブスブルク家に対して主権ある地位を確保しようとしていた若い共和国の権力者たちも」同様だったのである。

参考文献

- 江口 豊 (2013) 「ドイツ語圏活字メディアの歴史について—新聞を中心に—」(研究ノート) *国際広報メディア・観光学ジャーナル* 17, 3-12。
- (2014) 「ドイツ語圏における新聞の前身形態について」(研究ノート) *メディア・コミュニケーション研究* 66, 59-71。
- (2015) 「駅通制度と新聞成立の関連について」(研究ノート) *メディア・コミュニケーション研究* 68, 57-77。
- フェーブル/マルタン (関根他訳) (1985) *書物の出現* 筑摩書房、東京。(Febvre, L./Martin, H.-J. (1971) *L'apparition du livre* Paris.)
- Bogel/Blüm (1971) *Die deutschen Zeitungen des 17. Jahrhunderts*. 2 Bde. Band I — Text. Schünemann Universitätsverlag, Bremen.
- Dahl, F. (1946) *Dutch Corantos 1618-1650*. Koninklijke bibliotheek the Hague.
- Hemels, J. (1977) Über Stand und Probleme der historischen Presseforschung in den Niederlanden. In: *Presse und Geschichte. Beiträge zur historischen Kommunikationsforschung*. Verlag Dokumentation München.
- Koopmans, J. W. (ed.) (2008) „Unverschämte“ „und Ärgernis erregende Nachrichten verboten“. Politische Einmischung in niederländischen Zeitungen des 17. Jahrhunderts. In: Welke, M./Wilke, J. (Hrsg.) *400 Jahre Zeitung. Die Entwicklung der Tagespresse im internationalen Kontext*. Edition lumiér, Bremen, S. 123-138.
- Koszyk, K. (1999): Allgemeine Geschichte der Zeitung. In: Leonhard, J.-F./Ludwig, H.-W./Straßner, E. *Medienwissenschaft. Ein Handbuch zur Entwicklung der Medien und Kommunikationsformen*. Walter de Gruyter, Berlin/New York, 896-913.
- Lankhorst, O. (2001) Newspapers in the Netherlands in the seventeenth century In: Dooley, B. /Baron, S. A. (eds.) *The politics of information in Early Modern Europe*. Routledge, London/New York. 151-159.
- Maier, I. (2003) Amsterdamer und Haarlemer Zeitungen („Couranten“) des 17. Jahrhunderts im Niedersächsischen Staatsarchiv zu Oldenburg. In: *Gutenberg Jahrbuch*, 78, 170-191.
- Stöber, R. (2005) *Deutsche Pressegeschichte*. UVK, Konstanz.
- Weber, J. (1992) »Unterthenige Supplication Johann Caroli / Buchdruckers« Der Beginn gedruckter politischer Wochenzeitungen im Jahre 1605. In: *Archiv für Geschichte des deutschen Buchwesens*, Bd.38, S.257-265.
- Welke, M. (2008): Johann Carolus und der Beginn der periodischen Tagespresse. Versuch, einen Irrweg zu korrigieren. In: Welke, M./Wilke, J. (Hrsg.) *400 Jahre Zeitung. Die Entwicklung der Tagespresse im internationalen Kontext*. Edition lumiér, Bremen, S.9-116.

注

- 1 本論攷は、科学研究費補助金「ドイツ語圏等における新聞制度成立の背景に関する研究」(課題番号26570001)の支援を受けて実施されている研究成果の一部である。
- 2 Koszyk (1999, 897) は、新聞発行開始をフランスで1620年、イギリスで1620年から1622年としている。
- 3 敢えて和訳すれば『イタリアおよびドイツ通信』
- 4 Maier は、オランダ国内(ハーグ発の記事)では発信日と印刷日の間に確定した時間差が想定できないこと、

翌週の紙面も当該の紙面同様金曜日発行となっていることも根拠としている。

- 5 脚注 3 同様『諸国ニュース』
- 6 Lankhorst (2001, 152.) 参照。フランス語タイトルはそれぞれ *Courant d'Italie et d'Almaigne* および *Nouvelles de divers quartiers* という。
- 7 Hatin は、パリに現存するこの両紙を誰かが同時に購読していたと推測している。
- 8 Wilke, J. (2008): *Grundzüge der Medien- und Kommunikationsgeschichte*. Böhlau Verlag, Köln/Weimar/Wien, 16. 参照。
- 9 現ポーランド領グダニスク。
- 10 現ロシア連邦カーニングラート。
- 11 現ポーランド領シュチェチン。
- 12 Füssel (1999) *Gutenberg und seine Wirkung*. Insel Verlag, Frankfurt/Leipzig, S. 46.
- 13 発行曜日が一定しないので、タイトルの曜日がその都度変わっていたらしい。
- 14 印刷が不鮮明であること、正書法が現代語とは異なりかつ一貫していない、400年ほど以前の言語であることなどが解説を所々で困難にしている。
- 15 この後1623年にはインドネシアでの胡椒貿易を巡り、オランダ側がイギリス人や日本人傭兵を拷問の上虐殺するアンボン島事件が起き、オランダがインドネシアを独占していく。

(2015年11月 4 日受理、2015年11月 4 日最終原稿受理)

《SUMMARY》

〈research in progress〉

On the emergence and historical development of newspapers
in the Netherlands

Yutaka EGUCHI

The first newspapers in the Netherlands were published already in 1618 in Amsterdam, 13 years later than the first by Johann Carolus, followed others in Arnhem and Delft. The question as to how the newspapers were spread in other territories as the German speaking area has many aspects to consider. These aspects concern of course conditions like printing, supply and demand of news, political tolerance and so on. Searching for the causes of why the newspaper spread quite early in the Netherlands is not possible without considerations about political and economic circumstances in the 16th and 17th century not only in Europe but also in the whole world. Based on Dahl (1946) and other researchers, this paper argues in particular that the global political and economic activities of the land caused and promoted an information flow i.e. the newspapers in the Netherlands as the articles in the first numbers of newspaper show. The problem outlined here is only a part of the complex phenomena about the spreading process of “the newspaper” in the Netherlands. It is further necessary to investigate such factors as the post, the readership as the consumers, and the censorship of journalism and so on also in the Netherlands.